

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：35414

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590199

研究課題名(和文)入院病棟における小児患者のストレス軽減への絵本の効果

研究課題名(英文)The effects of picture books reducing the stress of hospitalized infant and young patients

研究代表者

丸山 愛子(MARUYAMA, Aiko)

日本赤十字広島看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：00583931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：病院でどのように絵本が利用されているのかを調査した(研究1)結果、絵本は様々な理由で利用されており、患者へのストレス軽減を目的としても病院で提供されていることが明らかになった。児童(N=41)と成人女性(N=72)を対象に絵本を読んだ前後の自分の気持ちの変化について評定させた結果、ストレスが軽減されたと判断できる結果が得られた(研究2)。しかし、絵本の内容によっては不安が増すことが示された。そこで、入院している小児患者(N=52)に死や病気を描いた内容を省いた絵本を読んでもらい、ストレスが軽減するかどうかを検討した(研究3)結果、絵本を読むことで小児患者のストレスが軽減されることが示された。

研究成果の概要(英文)：This study firstly revealed that picture books are used primarily for relieving the stress of young and infant patients as well as for other various reasons, by surveying how picture books are used in hospitals. The study secondly distributed a questionnaire and asked 41 Japanese children and 72 female university students to rate their changes in their feelings after reading a picture book. Its result showed that both the children and the students recognized their stress was reduced by reading the book, and that they were apt to increase their anxiety after reading a picture book dealt with death or sickness. The study thirdly delivered a picture book dealing with no contents of death or sickness to 52 hospitalized infant and young patients, and asked them to rate their changes in their feelings after reading the book. Its result showed that reading a picture book not dealing with death or sickness reduced their stress of infant and young patients.

研究分野：社会科学

キーワード：絵本 小児 患者 ストレス 病院 入院 家族 癒し

1. 研究開始当初の背景

病院における絵本といえば、子どもに対して医療的な知識や治療を説明する際の補助的道具として活用されることが大半であった。しかし、近年、患者のストレス軽減への絵本の有効性に関心が集まりはじめている。

医療施設での入院生活を余儀なくされた場合、患者には身体的かつ精神的な負担がかかる。生命の存続に直結しない病気や怪我(骨折など)であっても、それまでの生活で体験したことがない様々な制約(身体的拘束)を受けることが多いため、患者のストレスは増加する。そうした病院のなかで、小児患者のストレスを軽減するものとして、絵本の読みかせや絵本読療に関する研究が行われはじめている。しかし、各医療機関において、そもそもどのような理由でどの程度絵本が患者に提供されているのかなどの現状は把握されていない。また、絵本を読むことによって人のストレスが軽減されるのか、どのような絵本がなぜストレスを軽減するのかなどについてもいまだ解明されていない。

2. 研究の目的

(1). **研究1**: 小児患者を治療している病院において絵本がどのように活用されているかを実態の調査より明らかにする。

(2). **研究2**: 研究1より、病院で絵本を選定しているスタッフは、どのような内容の絵本が小児患者のストレスを軽減するのか知りたいと思っていることが明らかになった。また、病院で絵本を読むのは小児患者だけでなく、付き添う家族も含まれており、多くの場合小児患者に付き添う母親が、絵本を読みかかせていることがわかった。

研究1の結果を踏まえ、小児患者を対象に研究する前に、まず健常な子どもや成人女性を対象にして絵本を読むことでストレスが軽減されるのかを明らかにする。また、絵本の内容は多様なため、どのような内容がストレスの軽減と関係するのかを明らかにする。

(3). **研究3**: 絵本を読むことによって入院中の小児患者とその家族のストレスが軽減するのかどうかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1). 研究1の方法

研究対象 インタビュー調査: 小児患者を受け入れている総合病院(N=12)に勤務するスタッフ(N=16)。質問紙調査: 297箇所(選定は各県より最低5箇所をランダムに抽出)。

調査期間 インタビュー調査: 2013年6月~2014年3月。質問紙調査: 2014年3月~6月。

調査内容 小児患者を受け入れている総合病院に勤務するスタッフへのインタビュー回答に基づき質問紙調査の質問内容を検討。

インタビュー調査、質問紙調査どちらにおいても、絵本の設置の有無と設置理由、病院内で設置あるいは提供されている場所、整備されている絵本の数、管理の仕方、絵本の利用者と利用者の年齢、絵本の設置に対する患者の反応、絵本の選定方法、選定方法の見直しと頻度、患者とその家族からの意見の把握方法、などについて質問した。

データの分析方法 インタビューで得られたデータは、KJ法により分類した。量的データは、SPSSによって統計的な分析を行った。

倫理的配慮: インタビュー調査は研究協力者の日常業務に差し支えない時間に行った。研究協力施設には調査データはすべて匿名で処理すること、データを学会や論文で公表したい旨を説明して承諾を得た。質問紙調査は郵送にて依頼し、無記名で郵送にて返送してもらった。研究倫理審査については、日本赤十字広島看護大学の研究倫理審査委員会にて審査してもらい、承諾を得てから実施した。

(2). 研究2の方法

調査期間: 2014年2月~2014年5月。

研究対象: 小学生61名(平均年齢約11歳)、看護大学の学生143名(平均年齢約19歳)。

手続き: 対象者全員に文書と口頭にて手順を説明した。参加は自由意志に基づき、200冊以上

の中から今まで読んだことのない絵本を自由に1冊選択して読んでもらい、直後に無記名式の質問紙調査に回答してもらった。回答用紙は回収箱に投函してもらった(参加回数は各人1回)。
児童へ質問紙調査：対象としたのは主に、2つの条件を満たしている児童とした。第一に、絵本をひとりで読んで理解でき、かつ質問紙調査の内容も理解できて、自力で回答できる小学生であること、第二に、研究参加に関して、保護者からの参加の承諾が得られていることが参加の条件であった。

成人への質問紙調査：A看護大学の学生143名に呼びかけ、自由参加にて実施した。

調査場所：研究対象者が日頃活動している施設内で、他の利用者の迷惑にならず落ち着いて読書できる部屋において実施した。施設の管理者やスタッフの承諾を得た上で行った。

調査材料：児童への負担を軽減するため、絵本のページ数の多すぎるものは避け、児童がひとりで15分前後の時間内で読めると予測される容量の絵本を予備調査1の結果と併せて用意した。また、質問項目は、回答時間が10分以内におさまるように厳選した。

予備調査1：図書館で貸し出しの多い人気の絵本、インターネットや出版物で紹介されているおすすめ絵本、絵本療養を実施している病院の資料などを参考に2013年7月から2014年12月に資料を収集し、絵本を選定。

調査内容：無記名式の質問紙調査により行った。各質問には逆転項目をいれ、項目の順番による効果を避けるため、質問項目の順番をランダムに並び替えたものを5種類用意した。調査項目は以下4種類の内容から構成される。

自分の気持ちの変化に関する質問：絵本を読む前後での自分の気持ちの変化について評価してもらった。絵本を読む前後で20種類の気持ちがどれくらい変化したと感じるかを尋ね(自分の気持ちの変化に対する自己認知)「4:とても増えた」から「1:とても減った」までの4段階評定で回答してもらった。

ストレスの軽減を測定するための質問項目：

自己の内面の感情変化に関する項目は、癒しの心的構造を検討した秋元(2003)「気分調査票」(坂野他, 1994)、「多面的感情状態尺度」(寺崎・岸本・古賀, 1992)などの研究結果に基づいてオリジナルに作成した。

絵本の特徴に関する質問：知識を紹介した絵本、文字や絵などの情報量が多い絵本、生死や病気など生命に関係した絵本、以上3項目。

絵本の内容に関する質問：内容についてどのように認知されているかを測定するため、以下についてどの程度あてはまる内容か尋ねた。思いやり・愛他的内容、平和な内容、ユーモア溢れる内容、驚きや発見のある内容、ゆったりとした内容、せつない内容の6項目。
絵本への印象・絵本を読んだ感想に関する質問：絵本への印象や感想について測定するため、絵本の内容が好き、絵や写真が好き、自分で何度も読みたい、他の人にもぜひ読んでもらいたい、疲れた、以上5項目。

絵本の特徴に関する質問(3項目)、絵本の内容の認知に関する質問(6項目)、絵本への印象・絵本への感想に関する質問(5項目)計14の質問は、オリジナルに作成したものである。各質問に対しては、「4:とてもあてはまる」から「1:まったくあてはまらない」までの4段階評定によって回答してもらった。

データの分析方法：量的データについては統計ソフト(SPSS)を使用し、統計学的に処理。

倫理的配慮：研究実施前に日本赤十字広島看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。対象者には参加は任意であり、参加・不参加により不利益は一切生じないこと、学生に対しては評価とは一切関係ないことを口頭と書面で伝え、無記名で回答してもらった。

(3). 研究3の方法

調査期間：2015年12月から2016年2月。

研究対象：入院中の小児患者とその親、52組。

調査場所：小児患者の入院している各病室。

手順：施設の管理者の承諾を得た上で、主治

医の許可が得られた（健康上調査協力に問題の無い）対象者にのみ調査を実施した。病原菌が本を介して移らないように、絵本は返却後に毎回消毒して次の患者に貸し出した。

調査内容：30分のインタビュー調査と質問紙調査（研究2と同じ質問に絵本を読む前後の笑顔・会話・痛み・ゲームやテレビ視聴時間等の増減を尋ねた質問）に回答してもらう。

調査材料：研究2で準備した絵本から生死や病気を描いた内容の絵本を取り除いたもの。

データの分析方法：量的データについては統計ソフト（SPSS）を使用し、統計学的に処理。

倫理的配慮：概要・目的、方法、安全性、個人情報への守秘に徹してプライバシーを保護すること、研究協力と辞退の任意性、協力しないことで不利益は一切ないこと、結果の公表方法を文書と口頭にて説明し、研究協力への同意を得た。対象が未成年の場合には保護者へも依頼書を作成し、保護者と本人からの同意を得た上で調査に協力してもらった。日本赤十字広島看護大学研究倫理委員会及び各病院の研究倫理委員会承認後に実施した。

4. 研究成果

(1). 研究1の成果

小児患者を受け入れている病院のスタッフへのインタビューと質問紙調査から得られた回答（43件）結果は、ほぼ一致していた。

絵本の設置の有無：インタビュー調査と質問紙調査において回答の得られたすべての病院において、病院内に絵本が設置されていることがわかった。しかし、回答率が低いことから、絵本を設置している病院のみが回答してくれた可能性があるため注意が必要だ。

絵本の設置理由：絵本を病院で提供している理由について回答を分類した結果、主に6つに大別できた。第一に、病気の内容を説明するため・治療するための補助的道具として絵本を用いる。絵本は小児患者が病気や治療を理解するのに役立つと捉えられていた。第二に、小児患者が知識を習得・学習するために

院内学級の教材として絵本が利用されていた。第三に、ストレスを軽減するものとして診察の待ち時間や閉鎖的な病棟で入院患者が過ごす際に絵本は提供されていた。第四に、小児患者の遊び道具として適切な玩具であるとの理由から絵本は用意されていた。第五に、ただ単に患者が退院時に病院に置いていった（寄付を含む）ためもったいないのでそれらの絵本を活用しているとの理由もみられた。第六に、小児患者と病院側の治療スタッフまたは家族とのコミュニケーションを促進する媒介物に絵本がなりうることから用意されていた。

設置・提供されている場所：絵本の置いてある場所は、外科系病棟、内科系病棟、療養病棟、外科系外来、内科系外来、内科外科系混合外来、院内学級、診察を待つ部屋や閉鎖的で限られた病棟空間など小児患者が出入りする病院内の様々な場所で提供されていた。

絵本の利用者とおよその年齢：利用対象者を0歳児～2歳児、3歳児～6歳児、小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学生以上、成人の7つに分類し、利用頻度を尋ねた結果、絵本を最も多く利用していると認知されていたのは3歳児から6歳児の子どもであり、次いで成人であった。文字を読めない3歳児から6歳児の子どもが、成人（両親や保護者にとって代わる人）に絵本を読み聞かせてもらうためと考えられる。続いて、0歳児～2歳児、小学校低学年、小学校中学年・小学校高学年、中学生以上の順で、利用人数や年齢の正確な算出は困難との回答が多かった。

絵本の設置に対する患者の反応：約9割以上の病院において、絵本を読む患者と家族、病院スタッフが絵本の設置に好意的で喜んで読んでいると認識していることがわかった。

絵本の選定：絵本の選定基準は、人気の絵本ランキングや良書推薦の資料を参考にし、寄贈されたものを利用、スタッフの独断による選定、小児患者とその家族の推薦による選

定などによって行われていた。しかし、どのような内容の絵本が子どものストレスを軽減するのかについては不明であるため、絵本選定に関係する担当者は、選定に有用な資料の入手を願っていることが明らかになった。

研究1の結果から、多くの病院が患者に絵本を提供していること、絵本の利用には様々な理由や目的のあることが明らかになった。また、多くの病院において、患者のストレスを軽減させるのに絵本が有効であるとの認識から提供されていることがわかった。同時に絵本は、小児患者の病気についての知識習得を目的として使用されるだけでなく、一般的知識の習得や学習の援助教材としても有効だとの考えから病院に設置されていた。この結果は、医療関係者が小児患者の病気への理解を助けるものとして絵本を位置づけるだけでなく、患者の退院後も視野にいれ、円滑な社会復帰を援助できるように医療施設の環境を整えていることを示唆していよう。

(2). 研究2の成果

児童41名、成人女性72名から得られた回答を分析した主な結果を以下に示す。

自分の気持ちの変化に関する質問：絵本を読んだ前後の気持ちの変化に関する自己認知20項目について因子分析(バリマックス回転)を行った結果、児童と成人女性の結果においてともに5つの因子が抽出された。のんびりした気持ち、おだやかな気持ち、あたたかい気持ち、ほっとする気持ち、やさしい気持ち、やわらいだ気持ちの6項目からなる第1因子は「くつろぎ・安心感」とした。力がわいてくるような気持ち、元気な気持ち、うれしい気持ち、幸せな気持ち、たのしい気持ちの5項目からなる第2因子は「活性・充足感」とした。いらいらするような気持ち、さびしい気持ち、落ち込む気持ち、悲しい気持ちの4項目からなる第3因子は「抑うつ感」とした。すっきりした気持ち、無・空っぽになれるような気持ち、何にも縛られないような気

持ちの3項目からなる第4因子は、「爽快・解放感」とした。いやなことを思い出した、怖い気持ちの2項目からなる第5因子は「不安感」と命名した。

気持ちの変化と絵本の内容との関係：5因子が抽出されたため、気持ちの変化について評定した各評定得点から因子ごとに平均値を算出し、平均値と絵本の特徴や内容について得られた評定得点の平均値との関連について相関分析(Pearsonの相関係数を算出、両側検定)を行った。その結果、気持ちの変化、絵本の特徴、内容、絵本を読んだ後の感想の間には多くの相関関係がみられた($p < .01$)。

「くつろぎ・安心感」に関する気持ちが読む前より増えたと認知されていた絵本は、思いやりや他者への愛に関して描いた内容、平和な内容、ゆったりした内容のものであった。

「活性・充足感」と「爽快・解放感」に関する気持ちが読む前より増えたと認知されていた絵本は、ユーモア溢れる内容と認知されていた絵本であった。また、「くつろぎ・安心感」が増える絵本は、内容が好きなものであり、「活性・充足感」が増える絵本は、絵や写真が好きと認知されている絵本で、他者にも読んでもらいたい絵本であることが示された。

しかし、生命について考える絵本の場合、「活性・充足感」や「爽快・解放感」に関係する気持ちは読む前より減るのに対し、「抑うつ感」や「不安感」は増えたと認知されていた。この結果より、生死や病気など生命に関する題材を扱った絵本は、ストレスの軽減に繋がらない可能性が示唆された。生命の問題と関連した悩みを持つ小児患者と家族が多く利用する病院に設置する絵本選定には、生死や病気を描いた内容の絵本への熟慮が必要と考えられる。研究2の結果は、絵本は子どもだけでなく大人の感情にも影響を及ぼし、ストレスの軽減に役立つことを検証した。

(3). 研究3の成果

研究2の結果と同様に、絵本の特徴(3項目)、

絵本の内容の認知(6項目)、絵本への印象や感想(5項目)の評定得点と5因子ごとに算出された評定得点の平均値との関連を検討するため相関分析(Pearsonの相関係数、両側検定)を行った。その結果、多くの相関がみられ($p < .01$)、病院に入院している小児患者にとっても、自分の気持ちの変化(ストレス軽減に関する項目)に関する5つの因子と絵本の特徴、内容、感想とは密接に関係していることが明らかになった。

研究3の主な結果より、小児患者が快適な気分になってストレスが軽減される絵本とは、絵が好ましく、思いやりや他者への愛を描いた内容、平和な内容、ユーモア溢れる内容、ゆったりした内容の絵本であることが明らかとなった。また、絵本を読みきかせることで小児患者のストレスのみならず、絵本を読み聞かせる親のストレスも軽減されることが示された。さらに、絵本を読んだ後では、親子ともに笑顔や会話が増えたとそれぞれが認識していた。絵本を読んでいる間、小児患者の痛み・きつさ(しんどさ)の程度が軽減されたと本人が認識していた。絵本を読んだ日はゲームやテレビ視聴時間がやや減少しており、親はこの変化を歓迎していた。

健康状態の良好でない小児患者に対して、診察や検査の待合室や閉鎖的な病棟において提供できるものは限られている。そうした環境において、衛生面での取り扱いに配慮すれば、絵本は物理的(持ち運び便利・設置が容易)にも、経済的(比較的安価)にも、特徴的(種類が豊富・自由選択が可能)にも入院中の小児患者のストレスを軽減するのに適しているといえよう。絵本が患者個人内により変化を及ぼすだけでなく、絵本を介して患者の大切な人という人間関係を築ける可能性を秘めたものであることにも今後注目したい。

引用文献

秋元貴美子, 佐藤清公, 高久暁, 外島裕, 永島正紀, 松本光, 山崎晴美(2003)「癒し」

の心理的尺度に向けて-「癒し」の心的構造をデータから求める-。34(8), 23-30.

坂野雄二, 福井知美, 熊野宏昭, 堀江はるみ, 川原健資, 山本晴義, 野村忍, 末松弘(1994)新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討。心身医学, 34, 629-636.

寺崎正治, 岸本陽一, 古賀愛人(1992)多面的感情状態尺度の作成。心理学研究, 62, 350-356.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

丸山(山本)愛子、小児患者を治療している国内外の病院における絵本利用の実態。日本心理学会第78回大会発表論文集、査読無、2014、484。

丸山(山本)愛子、ストレスを軽減する絵本 - 絵本をよむ前後における自分の気持ちの変化の認知と絵本の特徴や内容との関係 -。日本発達心理学会第26回大会論文集、査読無、2015、P3-104。

丸山愛子、成人のストレス軽減と絵本読解および絵本の内容との関係。第35回日本看護科学学会学術集会講演集、査読有、2015、681。

〔学会発表〕(計3件)

丸山(山本)愛子、小児患者を治療している国内外の病院における絵本利用の実態。日本心理学会第78回大会発表論文集、2014年9月12日、京都府、同志社大学。

丸山(山本)愛子、ストレスを軽減する絵本 - 絵本をよむ前後における自分の気持ちの変化の認知と絵本の特徴や内容との関係 -。日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京都、東京大学。

丸山愛子、成人のストレス軽減と絵本読解および絵本の内容との関係。第35回日本看護科学学会、2015年12月5日、広島市、広島国際会議場。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕特記事項なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

丸山 愛子 (MARUYAMA, Aiko)

日本赤十字広島看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 00583931

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし